# 巻頭言　教職員大会回想

日本教職員バドミントン連盟
副会長　稲石　一雄

教職員大会初出場から40年以上が経ちます。その間、理事長、副会長として運営に携わってきた立場からいくつかの事を書いておきます。

今年も記念Ｔシャツが人気でした。私が初めて参加した頃はありませんでしたので、初めて作られたときは嬉しかったものです。やがて人気が高まり、初日の体育館開場と同時に選手はＴシャツを買いに行きました。おかげで開会式に選手が集まらず困ったこともありました。当時、開会式は初日の団体戦前に行っていました。ところが第37回（平成10年）松山大会の時に暑さでプラカードを持った補助生徒が体調不良となることがあり、翌年の青森大会から室内での開会式にしました。なお、Ｔシャツのロゴにはteachersと書かれていたのですが、それに気づきeducatorsに直したのは関場前会長です。

第38回（平成11年）青森大会から派遣審判制度を導入しました。それまでは敗者が主審を行っていました。しかし敗者審判制は主審をする選手にも試合を行う選手にも良いことはないだろうと考え、故今井正男氏を中心に数年前から準備を進めていました。とにかく負けた直後に暑い体育館で、立ったまま主審をすることが多かったのです。この大会はインターハイの直後に行うことが多かったので、大きな大会が続くため開催地で審判がなかなか集められないという事情もありました。そこで全国から募ることにしたのです。第１回目の参加者の中には次期理事長の吉川隆明氏や、ここで研鑽を積んで国際審判員になった人もいます。

第40回（平成13年）北九州大会から総合優勝制度を始めました。優勝回数は東京都が最多ですが、優勝あるいは表彰の順位に開催地が食い込んでくるということが多々あります。これは勝ち点ももちろんですが、大きな要素は参加点です。総合優勝を目指してできるだけ多くの選手に参加して欲しい、という思いで総合優勝制度を始めました。各都道府県連盟ではできるだけ多くの選手を集めていただきたいと思います。

総合優勝には文部科学大臣杯が授与されます。かつて教職員大会には文部大臣杯（当時）が５杯出されていました。ところが平成14年に文部科学省から大臣杯を１杯にする方針が告げられました。そこで何回か文部科学省に足を運んで折衝したのですが、結局16年度から１杯にするということになりました。それまでは一般男子単・一般女子単・一般男子複・一般女子複・成壮年男子団体に文部科学大臣杯が出ていたのです。しかし第43回（平成16年）島根大会から総合優勝に文部大臣杯が授与されることになりました。ところであの大きなカップですが、実は混合複の優勝カップだったのです。第30回（平成３年）豊橋大会を最後に種目が無くなり使われなくなっていたので、文部科学大臣杯として再び使用することにしました。

教職員大会の雰囲気は家族的とよく言われます。インターハイの後に生徒と一緒に大会に来る先生も多かったです。また今でも家族連れで参加をする選手も多いです。しかし運営や服装などについてはやや甘い点がありました。しかし第１種大会として守るべきことがあります。故今井正男氏がＪＥＦ理事になってからは、彼を中心にこの点を整備していきました。その後は吉川隆明氏がレフェリーとしてその方針を引き継いでいます。教職員大会は家族的なほんわかとした雰囲気を持ちながらも、守るべきことはきちんと守り、気持ちのいい大会であることが必要です。今後も厳しいながらも、楽しく端正な大会であり続けて欲しいと思います。

巻頭言
令和六年度　総会資料
総会議事録
一、令和五年度事業報告
令和五年度決算報告
令和六年度予算案
令和六年度事業計画案
一、大会参加者年齢枠検討
一、役員改選
一、派遣審判員規程改定の報告
一、その他
第六十三回大会資料
今大会を顧みて
レフェリー報告
令和六年度表彰者一覧
総合順位
成績表
団体戦　トーナメント表
個人戦　トーナメント表
表紙の人
派遣審判員一覧／お知らせ